むかしむかし　赤崎というところに　なまけもので　仕事もせず　酒ばかり飲んでいる男がいました。

「アーア　よう寝たわい。あと　いっときもしたら　今夜の祝事の酒がまた飲めるぞ。なますをちびちび食べながら　どぶろくをぐいぐいと　イッヒヒヒ・・・・。」

そういいながら　ぶらりぶらりと歩き出した。それからどれほどしたことか

「オーイ　だれか　だれか助けてくれー」

「オーイ　どうしたんじゃ。なーんだ　なまけものか。どうしたんじゃ　その傷は？」

「山を歩いておったらな　あのクソギツネにだまされてな　えー気分で帰ってきたのにコエダメに落とされてな、もう　くそうてくそうて　わしゃ　家に帰れんのじゃよ。」

男はよっぱらってしたことを　いつもいつもキツネのせいにしていました。」

**「きつねのまめもち」**

**赤崎の民話**

ところが　それをキツネが聞いたから
さあたいへん

「おのれ人間のぶんざいで　キツネさまを
だますとは　ふとどきな奴　生かしておいて
は世の中のためにならん　わしが食ってや
る」

そういって　キツネは男めがけてまっしぐら

「たっ　たすけてくれー。うらをキツネが
食べにきたんじゃ　痛いのはいやじゃ　うら
は　かかあをもろとらんのに死んでしまうの
はいやじゃ　だれか助けてくれー。」

「あっ　なまけもののやつ　また　おれたち
をだまそうとしているな。」

「いつもいつも同じことを言って　もうだまさ
れんぞ」

そういって村人たちは　だれも助けようとは
しませんでした。男は息をきらせながら
お寺にかけこんできました。

「おしょうさん　たすけてくれー。死ぬのは
いやじゃ　キツネをやっつけてくれー　わし
をかくまってくれー　死ぬのはいやじゃ」

いろりで　もちをやいているおしょうにすが
りつきました。

**「きつねのまめもち」**

**赤崎の民話**

「なんじゃ　そうぞうしい　またおまえか
おまえは気のいいやつじゃが　飲んでいるときはダメだなあ　またキツネにでもだまされたのか　ハッハハハ・・・・」

　そういって　おしょうは　戸口の方を見ると　大きなキツネが

「こりゃ　ぼうず　うそつきを出せー。」

「何　うそつき　うそつき？　うそつきを渡してもよいがのー　ちょっと待て、そうそう
その前に化けるのがうまいそうじゃのー。
どうか　そら豆に化けて見せてくれんか。
うまく化けたら渡してやろうじゃないか。」

「なーんだ　そんなことか　朝メシ前だ。
見ていろ　くそぼうず。」

フワーと白い煙とともに　キツネは化けた。

「これで良いか！」

「なんだ　豆といったのにカボチャじゃないか。」

「ウーン　なにくそ　これでもか。」

「まだまだ　それは　イモじゃないか。」

「ウーン　ならば　これならどうだ。」

すると　おしょうは　にっこり笑って

**「きつねのまめもち」**

**赤崎の民話**

「ホホー　うまいもんじゃ　それでよい　それでよい。」

　と言いながら　おしょうは　火ばしで　そら豆をつまむと　焼きあがったモチの中に　つっこみ、

「アッチッチチ　くそぼうず何をする！」

「そのまま　そのまま　アッチッチチ　そのまま　そのまま！」

ポイッと食べてしまった。

「よいか　村人をだますような事をするんじゃないぞ。もう　どんな事があっても　わしはしらん。キツネに食われたつもりで　死んだつもりでやりなおせ。いいな！」

「はい　ようわかっただ　これからキツネさんをオラの恩人として　オラはいっしょけんめい働きますだ。」

それからというもの　男はキツネ塚をつくり　いっしょけんめいに働くようになったとさ。

**「きつねのまめもち」**

**赤崎の民話**